茅原悠紀 成功の法則

私を揺さぶる、グランプリ―。12月16日からボートレース住之江で開幕する1年の総決戦、SG「第40回グランプリ」に向けた特別企画。「Road to THE GRAND PRIXキャンペーン」と題した企画の第4弾としてトップレーサーの茅原悠紀（38＝岡山）にスポットライトを当てる。GP初優勝で得た喜び、その後の葛藤、趣味から得た学びについて、深く語った。

（取材日＝10月5日）

長い葛藤

今の茅原悠紀は無敵だ。技術的には言わずもがな。しかし、肝心なことはテクニックではない。心だ。長い葛藤を経て、〝没入力〟は誰にも負けないと自負する。「今はボートに乗りたくて仕方がない（笑い）」。悩んだ過去を乗り越え、自分なりの答えにたどり着き、設定したゴールに向かって、全力でボートレースに対峙（たいじ）している。

若くして頂点を極めたことが、悩みを生んだ。14年12月、平和島。GP初出場で優勝する偉業を成し遂げた。しかも、優勝戦は緑色のカポック。6コースから強烈なスピードで突き抜けた、あの1Mはボート界の伝説になった。当時、27歳。「まずGPのカッパ（レーシングスーツ）を着られることがうれしかった。初出場ではあったけど、正直、優勝しか狙っていなかった。3カ月ぐらい前から減量も含め、ボート漬けの日々を送った。しっかり準備できていたし、気迫でも他の選手を上回っていたと思います」。優勝賞金で緑色の高級スポーツカーを購入。彗星（すいせい）のように現れた若者は、一躍、ボート界の人気者となった。

しかし、これが苦悩の始まりだった。子供の頃からレーサーに憧れ、高校時代はアマチュアボートに乗り、夢実現のイメージにつなげた。好きでたまらなかった世界は、いつの間にか、灰色の景色に変わっていた。「自分が好きでボートレーサーをやらせていただいているのに、GPを勝った後、いつの間にか、誰かの期待に応えなきゃいけない…という感情が強くなっていた。デビューした頃はどういう気持ちだったかな？　と過去を振り返り、この後、どうしよう？　と未来を見過ぎて、その瞬間に集中できていなかった。30～35歳の間はボートが好きではなかったです」。

苦しみを救ったのは〝遊び〟だった。釣り好きが高じて、カラフトマスを捕獲するため、知床半島をシーカヤックで1周した。2泊3日の行程に対し、準備に約2年。気象予報を勉強し、携帯電話の電波も飛んでいない場所で、避難ルートを頭にたたき込み、ありとあらゆるリスクに対応する計画を練った。その対応策が全てうまくいった。「こんなに勉強して、こんなに仕込めば、不測の事態が起きても、こんなにうまくいくんだ。これって、ボートレースと同じだと思った」。

遊び救う

プランを練り、善後策を講じ、目的を達成する。成功の法則をボートに応用した。23年はGP優勝を獲物に掲げ、1月1日から航海に出た。多少のアクシデントが起こっても、もう、何ら動じなかった。クラシック、グラチャン、オーシャンカップ、ダービー、チャレンジカップで優出。驚異的な安定感を身に付け、賞金ランク3位でGPへ。優勝はできなかったが、ここでも優出した。

24年には大村オーシャンカップで、平和島GP以来、約9年7カ月ぶりのSG制覇。そして、賞金ランク4位でGP出場。随所に存在感を発揮し、3着で表彰台に上がった。2度目の頂点へ向け、前進しているのは間違いない。誰よりも強い探究心を持って、水面＆ライバル攻略のプランを練っているに違いない。

27歳でGP優勝 この後、どうしよう？ 未来を見過ぎて 集中できていなかった

14年グランプリ

自己紹介

名前	茅原悠紀
生年月日	1987.7.11
自分の性格	自由で適当
趣味	渓流釣り（アウトドア全般）
特技	焚き火を安定させる事
得意な決め手	回し蹴り
好きな色	青
好きな食べ物	カレー
ひと言	いつも応援ありがとうございます！

茅原選手直筆

茅原 悠紀　私のグランプリ

枠番	選手名
1	池田 浩二
2	関 浩哉
3	桐生 順平
4	茅原 悠紀
5	篠崎 元志
6	宮地 元輝

これが俺のグランプリだ！　当企画に登場した選手が「理想のグランプリ」出走メンバーを独断で作成。いつか夢の大一番が実現する日がやってくる!?

↑茅原選手が考える優勝戦メンバー↑

14年グランプリ優勝戦